
禽、南瓜、あるいは、東京の、首都の、首都の東京の、ウラの、ウラはオモテで、コイントスニ

笹倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

あれ、よく、分かんないしゅ（びちや）

死亡推定（前書き）

もし君が死んでたらどうするの？

うん、考えてきてくれたかな？

そうか、そういう考え方もあるよね！。

そうだよね！。

うん、君に意見は聞いてないんだけどね。

死亡推定

／
「

林檎が一つ。

「東京は二つ存在する。コインに表と裏があるのと同じで、東京にも表と裏がある。埼玉にはない。埼玉は、そうだな、首都じゃないからだ。そういうものなんだ。東京は二つ存在する。俺は二度、それを言った。東京は二つある。三度、言った。俺は煩わしいのが嫌いだから。俺は林檎だから、煩わしいのが嫌いだ。分かるか？　そういうものなんだ。東京　裏の東京だ　は、腐ってる。一度、潰すんだよ。いいか、よく聞け。一度潰す。一度潰す。一度潰す。俺は、林檎は、煩わしいのが嫌いだが、四度言った。もう一度言う」

林檎は動かない。しかし、林檎は喋る。

「東京を、潰す」

／オモテ東京

その日、原宿の少女達は恐怖した。渋谷の少年達は恐怖した。銀座のオンナ達は恐怖した。品川のサラリーマン達は恐怖した。本能的に、恐怖した。林檎だ、と誰かが言う。林檎だ、林檎だ、と少女は、少年は、オンナは、サラリーマンは、口々に言った。伝染だ。眩きは叫びに変わる。林檎だ、林檎だ、林檎だ、林檎だ！ ある者は座り込み、ある者は失禁し、ある者は気絶した。オモテはウラを見ることできない。オモテはウラを見ることが出来ない。オモテはウラを見ることが出来ない。しかし、感じる。恐怖！ 圧倒的な！ 恐怖！ 刃物の切っ先が向けられている。銃口がこちらを向いている、裏側から削られていく、そういう感覚。少女は恐怖する。少年は恐怖する。オンナは恐怖する。サラリーマンは恐怖する。林檎は動かない。オモテ東京に林檎は存在しない。君たちが知っている林檎は、林檎じゃあないんだよ。

ノウラ東京ノドクター・パンプキンの診察室

ドクター・パンプキンはひどく緩慢な動きでキーボードのエンターキーを押した。モニターに文字列が表示される。フルミヤにはその文字列の意味が理解できない。ドクター・パンプキンはサイズの合っていないカボチャの被り物を揺らして、モニターからフルミヤの方へ視線を移した。どうっすか、とフルミヤは聞いた。ドクター・パンプキンは答えない。フルミヤの方へ体を向けたまま、またエンターキーを押した。文字列が消える。エンターキー。文字列が表示される。エンターキー。文字列が消える。エンター、文字列、エンター、消える、エンター、表れる、エンター、消え、エンター表れる、エ

ンタ消、エンター表、エン表、エン裏、裏、裏、オモテ。フルミヤの耳元で起動音がする。かちゃ、かちゃ、とエンターキーを連打する音も聞こえたが、やがて、消えた。フルミヤは喋らない。ドクタ―・パンプキンも喋らない。ウラはオモテに、オモテはウラに。フルミヤは今ウラに居る。ならば？

オモテだ。フルミヤは、オモテに行く。

／オモテ東京

フルミヤはコンビニ店員だ。注文されたタバコを取って、客に渡す。金を受け取って、釣りを渡す。ありがとうございました、と言った。もう上がっていいよ、と店長が言う。礼をして休憩室に戻り制服を脱ぎ私服を着替えて店を出る。ナイフは？ ナイフはどこにある？ ポケットだ。そのジーンズのポケットに、ナイフはある。フルミヤはコンビニ店員である。フルミヤは殺人鬼でもある。呼吸だよ、とフルミヤは笑う。呼吸みたいなもんなんだ、人を殺すのつて。

コンビニからの帰り道、路地裏。フルミヤは歩く。一人だ。フルミヤの感覚は研ぎ澄まされている。冬の六時半だ、もう辺りは暗い。しかしフルミヤの目には見えている。フルミヤは感じている。来るよ。女だ。二十五歳で、先日彼氏にふられて傷心、趣味はエアロビクスだ。フルミヤの感覚は研ぎ澄まされている。だから、分かる。

女が現れる。フルミヤの正面。フルミヤの方へ歩いてくる。二十五歳で先日彼氏にフられて傷心で趣味はエアロビクスの女だ。フルミヤも歩いている。後十五歩ですれ違う。十歩、八歩、三歩、一歩、（しゅ）、（びちゃ）、フルミヤは歩き出す。ナイフには血が滴っていて、女は首を押さえて、倒れこんでいた。呼吸だよ、と言う。フルミヤは返り血を浴びていない。ナイフをジーンズにしまう。歩き出す。女は死んでいる。

帰りに、青果店があつた。色とりどりの果実が売られている。林檎が置かれていた。

「こんなものは林檎じゃあないよ」

フルミヤは言う。従業員が首を傾げた。その瞬間に、コイントスだ。

世界は止まる。フルミヤも止まる。オモテはウラに。ウラはオモテに。今はオモテだ。ならば？

ウラだ。フルミヤは、ウラへ行く。

紫煙肯定

／ウラ東京／ドクター・パンプキンの診察室

ドクター・パンプキンはひどく緩慢な動きでキーボードのエンターキーを押した。モニターに文字列が表示される。フルミヤにはその文字列の意味が理解できない。ドクター・パンプキンはサイズの合っていないカボチャの被り物を揺らして、モニターからフルミヤの方へ視線を移した。どうっすか、とフルミヤは聞いた。ドクター・パンプキンは答えない。フルミヤの方へ体を向けたまま、またエンターキーを押した。文字列が消える。エンターキー。文字列が表示される。エンターキー。文字列が消える。フルミヤは喋らない。ドクター・パンプキンも喋らない。ウラはオモテに、オモテはウラに。フルミヤは今ウラに居る。しかしコイントスは行われない。そういうものなんだよ。まだなんだ。エンターキーが連打されている。今はまだそれだけの事だ。

／ウラ東京／黒系ファミリィ

黒系はボスだった。ウラ東京のボスだ。シーハラは珈琲を淹れ、

黒系の前に出した。黒系は礼を言わずにそれに口をつける。ボスだからだ。シーハラは部下で、オレはボス。黒系はウラ東京を牛耳っていた。シーハラ、コイントスはいつだ？ 黒系は聞く。まだです。先ほど、行われたばかりですから。今回は八十時間ほど、停止していました。シーハラは答える。

「お前は何をしていた」

「パンプキン医師の所に行つて、後は普段通りに」

「やつは何と言っていた」

「あの人は何も言いません。ただ、次のコイントスの準備を」

そうか、と黒系は言った。それだけ。

スピーカーから音楽が流れる。それはクラシックであり、ロックンロールであり、マーチであり、ジャズであり、ブルースでもあった。子守唄みたいだ、と黒系は思う。その棒切れのような、系のよな、細い腕を伸ばしてスピーカーに触る。身体に音楽が響く。血が躍り、心臓が跳ねる。子守唄のようですね、とシーハラは口にす。黒系は音楽を、その子守唄を感じながら、「そんなことはないよ」と答えた。

／「
」

林檎が一つ。

「デリートは許されていない。エンターだ。エンターしか許されていない。デリートは許されていない。プログラムに。プログラムに許されていない。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。オモテへ。エンター。デリート？ プログラムに許されていない！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6258y/>

オモテ、ウラ、コイントス、林檎、南瓜、あるいは、東京の、首都の、首都の

2011年11月20日07時19分発行